

NO. 34
March '03

newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

児童・思春期文学と女性学

吉田純子

児童・思春期文学を研究していると、「夢のある楽しそうな研究でいいですねえ」という反応が寄せられることがあります。そうです。私も最初はそのつもりでした。J・R・R・トールキンの『指輪物語』（といてピンと来ない方は、映画『ロード・オブ・リングズ』と言えばお分かりでしょうか）やC・S・ルイスの『ナルニア物語』などの壮大なファンタジーに魅せられたことがこの道に入ったきっかけでした。20歳の頃は、「夢がある」と信じていました。ドウォーフや妖精や竜の登場する物語に、性差別だとかフェミニズムといった現実的な問題がよもや関係するとは思っていませんでした。

ところが、研究を進め、作品を読み進むうちに、様々な文学理論に出会い、また、私自身も「成長」したのか、児童・思春期文学の読み方も変化してきました。竜や妖精の登場するおとぎ話、ファンタジー作品であれ、リアリズムの小説であれ、それらが、「楽しい夢のある作品」で終始しないことに気づいたのです。つまり、文学作品が社会のイデオロギー教化装置の一つとして機能してきたこと、また、文学作品を文化・社会的な文脈での構築物と捉えるならば、作中の表象が時代のイデオロギーの記号を担っていることに注目せずにはおれなくなったのです。

グリム童話の研究者ジャック・ザイプスは、『赤頭巾ちゃんは森をぬけて』（*The Trials and Tribulations of Little Red Riding Hood* 1983）において、グリム兄弟やペローを始めとする多くのおとぎ話の作者が、子どもを含めた読者を相手に、「赤頭巾・赤帽子」という形象を用いて、男性による女性の支配というイデオロギーの教化をいかに成功裡に行ってきたかを例証してみせました。当初、グリム学者や民俗学者から猛反発を食らったザイプスは、後に増補版を出してパワー・アップし、持論をさらに展開しました。彼は、ペローが原話では自立心旺盛だった百姓娘を、可愛いばかりで虚栄心の強い、狼の餌食になるような無力な娘に作り換えたこと、また、グリム兄弟がペローの赤頭巾像を強化して、潜在的な逸脱者である少女を狼の餌食にした後、家父長的な獵師により救済する話に書き換えた、と主張しました。つまり、これらの少女たちは、

17世紀フランスと19世紀ドイツの近代化推進の一翼を担うべく、家父長社会の性役割を刷り込まれたアイコンとして使われたというのです。

1988年に私は、この本の翻訳グループにいましたが、本書のインパクトは相当なものでした。単に「赤頭巾」話の読み直しにとどまらず、児童文学、おとぎ話全体を新たな視点から見直すこととなりました。関係学会の中では、もちろん「旧世代」からの反発もありましたが、この本の翻訳・出版以降、夢と娯楽にあふれたおとぎ話や児童文学をフェミニズムの枠組みに入れることは、もはや「禁じ手」ではなくなりました。

私個人の研究がこの本から受けた影響は、アメリカの児童文学における家族物語を通史的に女性視点から読み直し、それを単著『アメリカ児童文学・家族探しの旅』（阿吽社）にまとめたことでした。本書で私は、ルイザ・メイ・オルコットの『若草物語』（*Little Women* 1868）を皮切りに、1990年代までの家族を扱ったアメリカ児童文学に描かれた女性像に焦点を当て、アメリカ近代社会の価値観を刷り込まれた女性役割を、アメリカ女性がいかに演じてきたかを分析しました。読者の少女たちは、いかに夢と娯楽を作品に求めたところで、イデオロギー教化装置たる児童書により、近代アメリカの文化的価値観を刷り込まれているのです。しかし、優れた作家は、そうした制約にもかかわらず、主人公の少女に精一杯のイデオロギーへの抵抗をさせています。オルコットの描くジョー・マーチは、当時の女性にあてがわれた良妻賢母の性役割に逆らい、独身で有名な作家となる夢を見て、社会や母親の仕掛ける「洗脳」に抵抗するのです。

では、少年読者たちがこうした刷り込みを免れているかといえば、彼らもイデオロギー刷り込みの磁場で「夢と娯楽」を楽しんでいることに変わりはありません。9・11以降の喧しいアメリカ例外主義の行方を観察していると、帝国アメリカのイデオロギー教化の道具として使われ続けてきた児童・思春期文学が、どのような少年像を描いてきたのかについて、何かを書かないわけにはいかなくなりました。

というわけで、現在、『少年たちのアメリカ』（仮題）という単著を執筆中です。

（英文学教授：アメリカ文学・文化論）

『女と男』

旧約学徒のアポロギア

飯 謙

「女性学」や「ジェンダー」といったタイトルの付くところで、旧約聖書を勉強しているとはなかなか言い出しにくい。旧約聖書を家父長制の出発点だと信じている人が多いように感じて、身構えてしまうからだろう。そこで、職業病というべきであろうか、このようなコラムからのお誘いをいただくと、愛する旧約テキストの弁明をして、その偏見を解かなければいけないという、おかしな使命感に駆られてしまう。では。

創世記によれば、神はまず土くれ（アダマー）から人（アダム）を造った。しかし彼が独りであるのを見て、神は「これは良くない（トープ）」と思い、パートナーとして、同じく土から獣や鳥（オーブ）を造り、一緒に生活させた。アダムはその鳥や獣に必死で「呼びかけた」が、それらはパートナーとならなかった。神の目論見ははずれたのだ。そこで神はアダムを「深く眠らせ」（ラダム）、あばら骨を一本とってエヴァを造った。だがここから、旧約が男を女に優越する者と見るとの歪んだ論調が生ま

れたのである。

この「パートナー」を、以前の邦訳聖書が「ふさわしい助け手」（よく読まれた英訳聖書the Revised Standard Versionはa helper）と訳したことが誤解をいっそう深めた。何やら一段低い、アシスタントというわけである。しかし原語のニュアンスは少し違う。「助け手」と訳されたヘブル語「エーゼル」の有名な用例に、詩編121編1-2節「我、山々に向かい目をあぐ／我が助け（エーゼル）は何処より来たるか／我が助け（エーゼル）は、天地を造った主より来る」がある。エーゼルは「救い」という意味で、基本的に神を指す。古代ヘブライ人にとって、神とは従属する対象ではない。共に歩み、呼びかけ、応えるパートナーであった。

女と男の関わりもこの類比性から語られる。マルティン・ブーバーはそこに「我と汝」という関係性を発見し、人間性の深遠な有り様を展開した。だから、旧約は……フー、「使命感」はどこへやら。何だか最後は自己弁護に走っていきそうだ。

（総合文化学科教授：キリスト教学）

『女と男』

私のセクハラ奮闘記

鷗野ひろ子

女が独身で働いていますと、様々なセクハラに会いますが、私の職歴はまさにセクハラへの対応の歴史でした。これから社会に出て行く女子学生の参考になればと思い、ほんの数例をご紹介します。

非常勤講師時代、自宅で翻訳のアルバイトをすべく、社長と事務員一人だけの翻訳会社で仕事をしたところ、気に入られ、事務員を辞めさせるので、事務所で電話番号をしながら翻訳をしると、しつこく迫られました。断ると、指導教官に悪口を言っていると脅されましたが、やはり独身女性であった私の指導教官は、すぐに状況を察知して、私を救って下さいました。先生も同じような苦勞をなさったのだらうと思います。

地方の国立大学の教育学部では、英語科で初めての女性でした。ある男性教官に昇任を助けてやるからと、迫られましたが、完全に無視したところ、何度も真夜中に変な声の電話でたたき起こされる始末。そして挙句の果てには、私の1つの論文をけなすための論文まで発表したのです。その人が他大学に移るまで、本当に暗い年月でした。

やはり、国立大学でのこと。ある委員会後の懇親会では、私がたった一人の女性でした。お酒が回ってくると、一人が私に突然、性的事柄について質問をしました。私の頭の中は真っ白となり声も出ないのですが、何度もその質問を繰り返します。回りの男たちも私がどのような反応を示すかを興味深々で見ていることはわかります。何分経ったでしょうか？誰かが別の話題を始めてくれたので、ほっとしたのも束の間、また先の質問を繰り返します。それを繰り返している内に、とうとう10数人いた男たちの一人が怒って止めてくれました。私は家に帰ってから、腸が煮えくり返る思いをしました。その場にあったビールでも頭からぶっかけてやれば良かったと思っても、後の祭りです。その事を人権委員に訴えましたが、結局、個人的な和解という解決方法を取られました。酒の席での少々の悪ふざけは、円滑に仕事をするための潤滑油だと言った人もいました。

神戸女学院では女性の院長・学長がおられ、男女が対等であり、女性の意見も尊重されますので、働きがいのある職場だと嬉しく思っています。男性に身構えていた私の男性観も変わりつつあります。

（英文学科教授：英文学）

2002年度年間活動報告

I 講演会・セミナー等

連続セミナー「アジアの女性とジェンダー」(定員30名)

会場：神戸女学院大学デフォレスト館206教室

〈第1回〉2002年6月7日(金)

「9つの種子をまもる

ーヴァンダナ・シヴァのエコフェミニズムー」

講師：金沢謙太郎氏(神戸女学院大学人間科学部専任

講師：環境社会学)

〈第2回〉2002年6月14日(金)

「アフガニスタンの女性たち」

講師：西垣敬子氏

(宝塚・アフガニスタン友好協会代表)

〈第3回〉2002年6月21日(金)

「日本植民地時代から戦後を生きた台湾の女性たち」

講師：松澤員子氏

(神戸女学院理事長・院長：文化人類学)

〈第4回〉2002年6月28日(金)

「人身売買ーアジアの女性と日本の知られざる関係」

講師：川村暁雄氏

(神戸女学院大学文学部専任講師：国際関係論)

[受講者数：72名 平均出席者数：51名

修了証発行者数：48名]



金沢謙太郎氏

西垣敬子氏



松澤員子氏

川村暁雄氏

特別講演会 2002年7月5日(金)

「女性の悲しみとシェイクスピア喜劇」

Mary Wrothの作品から見た『十二夜』の問題点」

会場：神戸女学院講堂

講師：楠 明子氏(東京女子大学文理学部教授、

同大学比較文化研究所長：英文学)

[出席者：180名]

特別講演会 2002年10月25日(金)

「はたらく女性

ー少子・高齢化社会における女性労働の展望」

会場：神戸女学院講堂

講師：藤井龍子氏(内閣府情報公開審査会委員、元

労働省女性局長)

[出席者：80名]



楠 明子氏

藤井龍子氏

学外講演会

会場：宝塚市立女性センター・エル(宝塚市)

〈第1回〉2002年11月17日(日)

「く女が語る・く男が語る」

講師：上西妙子氏

(神戸女学院大学文学部教授：フランス文学)

〈第2回〉2002年12月11日(水)

「今を生きる女性を心理学する

ーデータから読み解く現代女性と家族像ー」

講師：森永康子氏(神戸女学院大学人間科学部助教

授：ジェンダーの心理学、生涯発達心理学)

[出席者：第1回 20名/第2回 35名]



上西妙子氏

森永康子氏

II 研究助成

「近世法制史料にみる女性」

真栄平房昭[文学部・教授]

「J」ポップに見る男と女の言説」

難波江和英[文学部・教授]

III 学会等出張補助(国内・海外)

2002年度は申請なし。

IV 授業(科目名：Cu234「女性学」他)

前期はCu234(1)「女性学」[主題コース]として本学にて開講し、後期は西宮市大学交流センターに

て「ジェンダー論」[共通単位講座]として開講した。

V 学生懸賞論文(「女性学インスティテュート賞」)

2002年度(第4回)の選考結果は以下の通り。

〈優秀賞〉(2編):賞金 各2万円(賞状)

横田純子氏(神戸女学院大学人間科学部人間科学科
2002年3月卒)

井裕 薫氏(神戸女学院大学文学部総合文化学科
2002年3月卒)

表彰は2002年10月11日(金)神戸女学院講堂において学院の各種記念賞授与式とあわせて行われた。



井裕薫さん(横田純子さんはご欠席)

VI 出版物

『女性学評論』第17号

特集:こころとからだの間〈2003年3月発行〉

「ニューズレター」No.33 (2002年10月発行)

「ニューズレター」No.34 (2003年3月発行)

— 2003年度(第5回)学生懸賞論文募集 —

賞の名称は「女性学インスティテュート賞」。対象は本学学生(学部生・大学院生)及び2002年度の本学卒業生・修了生が執筆した女性学、ジェンダー・スタディーズに関連する領域の論文。

最優秀賞論文(1編)には賞金5万円及び賞状、優秀賞論文(2編)には各2万円の賞金及び賞状が授与される。また最優秀賞論文については『女性学評論』第18号(2004年3月発行予定)に全文が掲載される。

締切は2003年7月24日。選考結果の発表及び表彰は2003年10月中旬の予定。

詳細は当インスティテュートまで。



— 2003年度前期講演会等のご案内 —

■連続セミナー「デュエット—ジェンダーとアート(仮)」

日程:2003年6月6日~6月27日の間の金曜日、
14:00~15:30、全4回

会場:神戸女学院大学教室・神戸女学院講堂

講師:浜下昌宏氏(神戸女学院大学文学部教授)他
定員:30名 *3回以上の出席者には修了証を発行
〈申し込み:要、無料〉

■特別講演会

日程:2003年7月4日(金)10:20~11:10

会場:神戸女学院講堂

講師:北條文緒氏(東京女子大学現代文化学部教授、
同大学女性学研究所長)

〈申し込み:不要、無料〉

※詳細は4月以降に当インスティテュートまで。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティテュートでは、女性学、ジェンダー・スタディーズ関係の図書・資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

◎開室時間 月~金 8:30~16:30

但し、夏・冬期休業中の一定期間は開室となります。

◎利用資格 本学教職員・学生・卒業生

◎閲覧 開室時間中は自由にご覧ください。

◎貸出期間 2週間

◎貸出冊数 8冊まで

★女性学インスティテュートは図書館本館1階にあります。図書の閲覧・貸出希望者はT-14・13室まで。(帯出・返却の手続きはT-14室で行ってください。)

2002年度女性学インスティテュート編集委員

川合真一郎、三杉圭子、三浦欽也、高橋雅人、上西妙子
(委員長)(ABC順) 編集事務:豊福裕子

編集・発行:神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL/FAX:(0798)51-8545

E-mail:gender@mail.kobe-c.ac.jp

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/>